日本英文学会九州支部第 69 回大会

期日　2016 年（平成 28 年）
10 月 22 日（土）・23 日（日）

場所　中村学園大学
（〒814-0198 福岡市城南区別府 5-7-1）

日本英文学会九州支部
〒812-8581　福岡市東区箱崎 6 丁目 19 番 1 号
九州大学大学院人文科学研究院
西岡宣明研究室内
TEL (092) 642-2393　FAX (092) 642-2393
E-mail: nishioka@lit.kyushu-u.ac.jp
HP: http://kyushu-elsj.sakura.ne.jp

2015-16 年度　日本英文学会　九州支部　理事一覧

鵜飼　信光　（九州大学）
大島　由起子（福岡大学）
太田　一昭　（九州大学名誉教授）
大橋　　浩　（九州大学）
木下　善貞　（北九州市立大学名誉教授）
小林　潤司　（鹿児島国際大学）
高野　泰志　（九州大学）
高橋　　勤　（九州大学）
竹内　勝徳　（鹿児島大学）
登田　龍彦　（熊本大学）
西岡　宣明　（九州大学）
早瀬　博範　（佐賀大学）
向井　　毅　（福岡女子大学）
村里　好俊　（熊本県立大学）
山田　英二　（福岡大学）

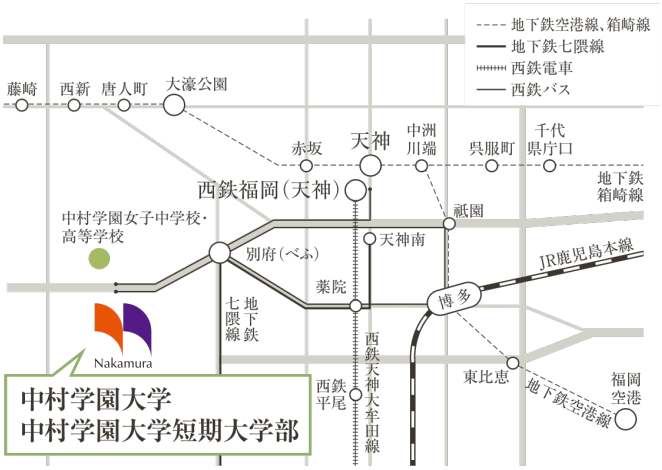
2016 年度　日本英文学会　九州支部　事務局員一覧

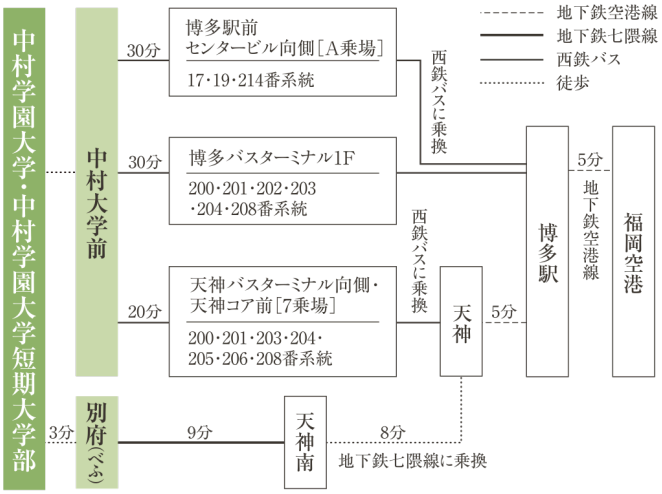
支部長・日本英文学会理事	西岡　宣明
副支部長・日本英文学会評議員	
『九州英文学研究』編集委員長	鵜飼　信光
事務局長	黒木　隆善
書記	田中　公介
書記	團迫　雅彦
書記	大塚　知昇

中村学園大学　アクセスマップ

〒814-0198 福岡市城南区別府 5-7-1 TEL 092-851-2531（代表）

☆会場には駐車場がございませんので、公共交通機関（福岡市営地下鉄・西鉄バス）をご利用ください。





■ 九州各県から福岡への交通のご案内

□福岡空港までの所要時間［飛行機］

鹿児島 ……55分（1日2往復）
宮崎 ……50分（1日14往復）
沖縄 ……1時間40分（1日21往復）

□天神バスターミナルまでの所要時間［高速バス］

大分（トキハ前）から……最速2時間16分（1日41便）
佐賀駅バスセンターから……最速1時間15分（1日45便）
長崎駅前から……最速2時間 7分（1日56便）
熊本交通センターから……最速1時間52分（1日91便）
宮崎駅から……最速4時間36分（1日28便）
鹿児島中央駅前から……最速4時間12分（1日24便）

□JR博多駅までの所要時間［JR鉄道］

大分駅 ……最速2時間01分（1時間に2本）［特急ソニック］
佐賀駅 ……最速35分（1時間に3本）［特急かもめ、みどり］
長崎駅 ……最速1時間50分（1時間に2本）［特急かもめ］
熊本駅 ……最速33分（1時間に4本）［九州新幹線みずほ］
宮崎駅 ……最速3時間30分（2時間に1本）［特急きりしま］+［九州新幹線みずほ］
鹿児島中央駅 ……最速1時間17分（1時間に3本）［九州新幹線みずほ］

（平成28年2月調査）※道路の混雑状況および経由先の関係で時間が異なります。表記はおよその所要時間です。※熊本駅、宮崎駅、鹿児島中央駅からのJR本数は［九州新幹線つばめ、さくら］を含みます。

中村学園大学　キャンパスマップ

http://www.nakamura-u.ac.jp/studentlife/campusguide/map.html をご参照ください。

学会はすべて（懇親会も含めて）2 号館で行われます。

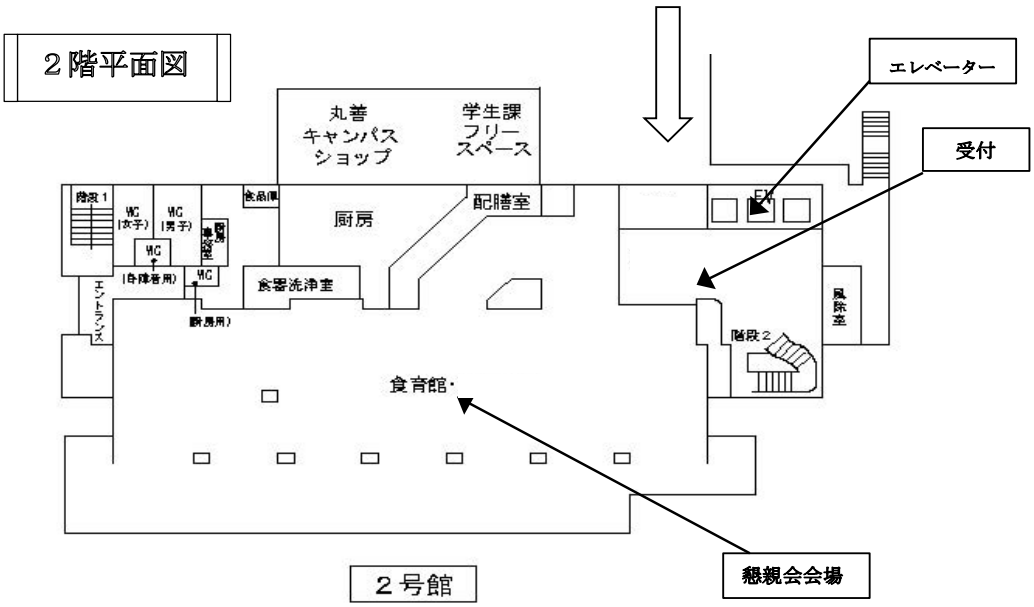
受付：	2 号館 2 階「食育館」前
開会式会場・特別公演会場・閉会式会場：	2 号館 4 階
発表会場・シンポジウム会場：	2 号館 6 階
控え室：	2 号館 5 階
大会本部・出版社展示会場：	2 号館 5 階
懇親会会場：	2 号館 2 階「食育館」

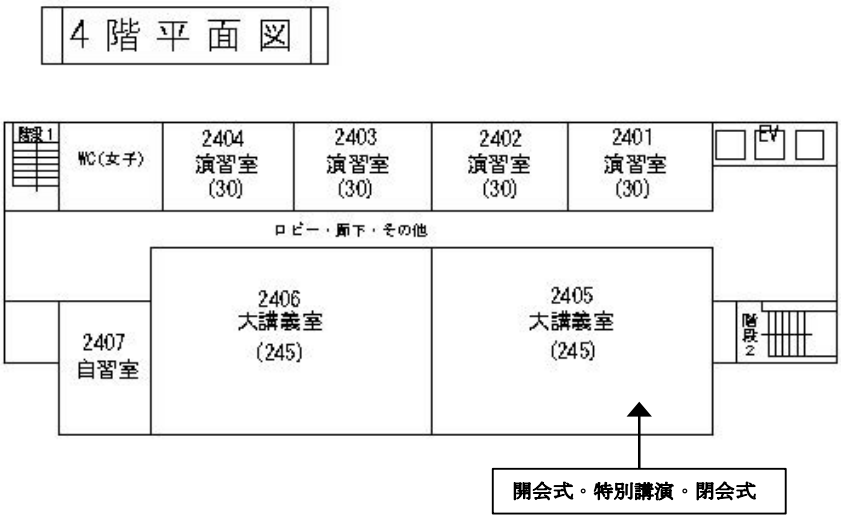
＊10 月 22 日（土）、23 日（日）両日とも学内の食堂は閉まっております。
昼食をご準備いただくか、弁当をご購入ください。23 日（日）の弁当を事前の予約にてご用意いたします。詳しくは、日本英文学会九州支部 HP (http://kyushu-elsj.sakura.ne.jp) をご覧ください。

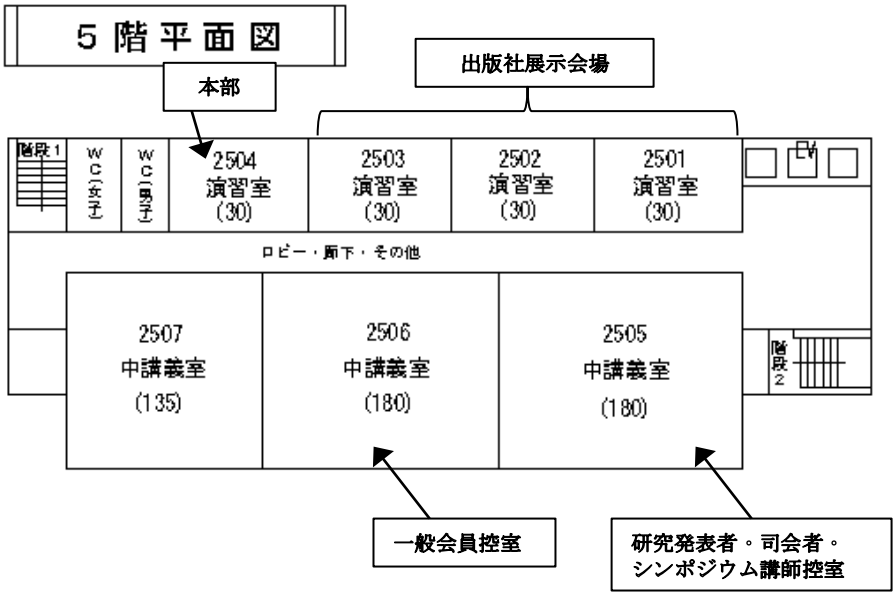
会場案内

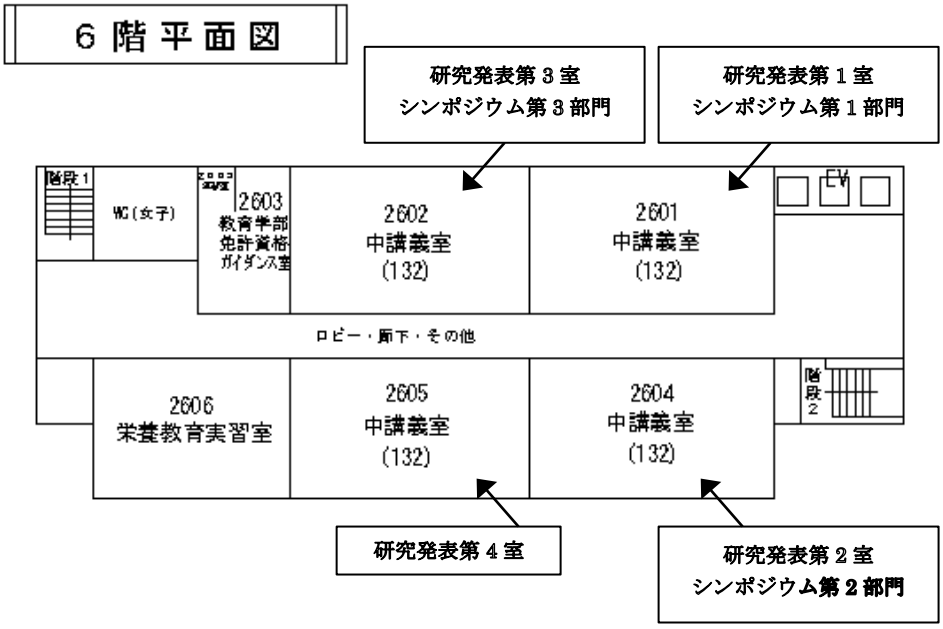
中村学園大学
（〒814-0198 福岡市城南区別府 5-7-1）

中村大学前バス停より、1 号館アステックス手前の階段を上がると左前方に入口






5 階 平 面 図
本部
出版社展示会場
階段1
WC(男子)
WC(女子)
2504
演習室
(30)
2503
演習室
(30)
2502
演習室
(30)
2501
演習室
(30)
EV
ロビー・廊下・その他
2507
中講義室
(135)
2506
中講義室
(180)
2505
中講義室
(180)
階段2
一般会員控室
研究発表者・司会者・
シンポジウム講師控室


6 階 平 面 図
研究発表第３室
シンポジウム第３部門
研究発表第１室
シンポジウム第１部門
階段1
WC(女子)
2603
教育学部
免許資格
ガイダンス室
2602
中講義室
(132)
2601
中講義室
(132)
EV
ロビー・廊下・その他
2606
栄養教育実習室
2605
中講義室
(132)
2604
中講義室
(132)
階段2
研究発表第４室
研究発表第２室
シンポジウム第２部門

大　会　日　程

10 月 22 日（土）

開　会　式　　（13 時）　　2405 教室

研　究　発　表（①13 時 30 分　②14 時 10 分）

第 1 室（イギリス文学）	2601 教室
第 2 室（アメリカ文学）	2604 教室
第 3 室（英　語　学）	2602 教室

シ ン ポ ジ ウ ム（15 時～17 時 30 分）

第 1 部門（イギリス文学）	2601 教室
第 2 部門（アメリカ文学）	2604 教室
第 3 部門（英　語　学）	2602 教室

懇　親　会（18 時 30 分～20 時 30 分）（会費　5,000 円　学生　3,000 円）

---

10 月 23 日（日）

研　究　発　表（①10 時　②10 時 40 分　③11 時 20 分　④12 時　⑤12 時 40 分）

第 1 室（イギリス文学）	2601 教室
第 2 室（イギリス文学）	2604 教室
第 3 室（アメリカ文学）	2602 教室
第 4 室（英　語　学）	2605 教室

特　別　講　演（14 時 00 分）	2405 教室
閉　会　式　　（15 時 30 分）	2405 教室

受付	2 号館 2 階「食育館」前
研究発表者・司会者・シンポジウム講師控室	2505 教室
一般会員控室	2506 教室
書籍展示会場	2501・2502・2503 演習室
大会本部	2504 演習室

日本英文学会九州支部第 69 回大会プログラム

日　時：2016 年 10 月 22 日（土）・23 日（日）
場　所：中村学園大学

第 1 日　10 月 22 日（土）
（受付は正午より 2 号館 2 階「食育館」前にて行います。受付では年会費の納入はできません。）

開会式　13 時 00 分より（2405 教室）

司会・九州大学教授　鵜飼　信光
開会の辞　支部長・九州大学教授　西岡　宣明
開催校挨拶　中村学園大学学長　甲斐　諭
開催校案内　中村学園大学教授　山根　一文
事務局報告　事務局長･九州共立大学准教授　黒木　隆善
優秀論文賞等選考報告　編集委員長･九州大学教授　鵜飼　信光
表彰式

研究発表（①13 時 30 分　②14 時 10 分）

第 1 室（2601 教室）　司会　九州大学名誉教授　太田　一昭

1. John Donne's *Songs and Sonnets* における恋人たちの身体
   熊本県立大学大学院博士後期課程　鳥養　志乃

2. 17 世紀イングランドにおけるペスト流行時の印刷出版物について
   九州国際大学准教授　國﨑　倫

第 2 室（2604 教室）　司会　福岡教育大学教授　江頭　理江

1. 近代性を揺るがす――『ハックルベリー・フィンの冒険』における魔術的言説
   九州大学大学院修士課程　古川　琢磨

司会　福岡大学教授　大島由起子

2. 演技する混血児――"Désirée's Baby"におけるイノセンス喪失とパフォーマンス
   九州大学大学院修士課程　松下　紗耶

第 3 室（2602 教室）　司会　長崎大学教授　廣江　顕

1. Modality と Mood から考察する If-clause の派生
   九州大学大学院修士課程　高場　清子

司会　産業医科大学准教授　田中　公介

2. Phrasal verb の分析――make out 構文の派生と構造
   九州大学大学院修士課程　柳本　拓志

シンポジウム（15 時～17 時 30 分）

第 1 部門「イギリス文学」（2601 教室）

実話から紡ぎ出すフィクション――21 世紀英連邦 歴　史　小　説（ヒストリカル・フィクション）が描く「周縁」の人々

司会・講師　水産大学校教授　高本　孝子
講師　福岡大学名誉教授　中村ひろ子
講師　西南学院大学助教　濱　奈々恵
講師　熊本県立大学准教授　水尾　文子

第 2 部門「アメリカ文学」（2604 教室）

書簡から見る Henry James――ライバル作家、家族観、プライヴァシー、ヨーロッパの表象

司会・講師　北九州市立大学准教授　齊藤　園子
講師　九州ルーテル学院大学准教授　砂川　典子
講師　九州産業大学准教授　志水　智子
討論司会・講師　佐賀大学教授　名本　達也
コメンテーター　京都大学教授　水野　尚之

第 3 部門「英語学」（2602 教室）

構文研究とコーパス

司会・講師　九州大学教授　大橋　浩
講師　九州大学助教　土屋　智行
講師　九州大学助教　横森　大輔
講師　九州大学特任准教授　Carey Benom

懇親会（18 時 30 分～20 時 30 分）

場所　中村学園大学内 2 号館 2 階「食育館」　（会費　5,000 円　学生　3,000 円）

第 2 日　10 月 23 日（日）

（受付は 9 時 20 分より 2 号館 2 階「食育館」前にて行います。受付では年会費の納入はできません。）

研究発表（①10 時　②10 時 40 分　③11 時 20 分　④12 時　⑤12 時 40 分）

第 1 室（2601 教室）

司会　山口大学教授　宮原　一成

1. 『恋する女たち』における同性間の絆

九州大学大学院博士後期課程　田島健太郎

2. The Gothic in Neil Gaiman's *Coraline*

福岡大学大学院博士後期課程　馮 書穎（ヒョウ　ショエイ）

司会　大分大学准教授　園井　千音

3. ロマン派とピクチャレスク――キーツの自然観に関する一考察

佐賀大学准教授　江口　誠

4. *Winnie the Pooh* と *The House at Pooh Corner* の詩からみる成長

福岡大学大学院博士前期課程　大関　真菜

司会　九州大学名誉教授・福岡大学名誉教授　山内　正一

5. イギリス・ルネサンス恋愛詩を歴史的に読む――スペンサー『アモレッティ』の場合――

（招待発表）熊本県立大学教授　村里　好俊

第 2 室（2604 教室）

司会　松山大学教授　矢次　　綾

1. *Barnaby Rudge* と群衆のメディオロジー――イメージとネットワーク

北九州市立大学大学院博士後期課程　原田　　昂

司会　福岡女子大学名誉教授　吉田　徹夫

2. 銀と茶の海賊――スティーヴンソンとコンラッド

（招待発表）福岡女子大学准教授　宮川美佐子

司会　九州大学教授　鵜飼　信光

3. 人肉嗜食、人狩り、屠殺――コンラッド作品におけるカニバリズムのモチーフ

九州工業大学非常勤講師　今川　京子

4. トールキンの聖戦

九州大学大学院博士後期課程　島居　佳江

---

5. 【発表なし】

第 3 室（2602 教室）

1. 【発表なし】

---

2. 【発表なし】

司会　熊本大学准教授　永尾　　悟

3. Ikkemotubbe の微笑みと生の横溢――1940 年代のアメリカと Faulkner のインディアン表象

九州大学大学院博士後期課程　吉村　　幸

司会　鹿児島大学教授　竹内　勝徳

4. 野生という思想―ソローからレヴィ＝ストロースへ

（招待発表）九州大学教授　高橋　　勤

---

5. 【発表なし】

第 4 室（2605 教室）

1. 【発表なし】

司会　宮崎公立大学教授　福田　　稔

2. 主語の島効果に見るフェイズ性の継承

九州共立大学准教授　黒木　隆善

司会　九州工業大学講師　前田　雅子

3. 制限関係節に関する考察――ラベリングアルゴリズムに基づく *that*-trace 効果との統合的説明

九州大学大学院修士課程　林　　愼将

司会　熊本大学教授　登田　龍彦

4. 動詞句副詞と意味役割

西南学院大学大学院博士後期課程　西村　知修

5. Asymmetry between Multiple Coordination and Modification

（招待発表）福岡大学教授　久保　善宏

特別講演　14 時 00 分より　（2405 教室）　司会　九州大学教授　西岡　宣明

関西外国語大学教授・大阪大学名誉教授　大庭　幸男

「英語構文とその拡張について」

閉 会 式　15 時 30 分より　（2405 教室）

挨　　拶　中村学園大学准教授　木原美樹子

〈第 1 日〉10 月 22 日（土）

研　究　発　表

第　1　室（2601 教室）

司会　九州大学名誉教授　太田　一昭

1.　John Donne's *Songs and Sonnets* における恋人たちの身体

熊本県立大学大学院博士後期課程　鳥養　志乃

本研究では John Donne の恋愛詩集 Songs and Sonnets において、身体がどのように用いられ、詩が展開しているかを論じている。この詩集の中で、Donne は自身の豊富な知識を基に奇抜な発想を盛り込み詩作を行っている。しかし彼は始めから独創的な詩人であった訳ではなく、同時代の他の詩人たちが用いた「身体の交換」による恋人間の献身という題材を複数の恋愛詩の中で登用している。しかしその様な詩で敢えて恋人である女性の不貞を非難する様な流れに展開させることで、自身の独創性を築いている。別の恋愛詩でも身体の交換が軸に置かれるが、その詩の最後ではお互いが別々の存在であり続けるのではなく、二人の身体を一つにすることで、交換を要しない関係になろうという提案が行われる。更に、Donne の恋愛詩はその難読さと哲学性に合わせて、身体的に一なる存在の恋人達が登場することになる。Songs and Sonnets を鑑賞するうえで、身体に焦点を置くことで新たな読みが発見されることを主張する。

2.　17 世紀イングランドにおけるペスト流行時の印刷出版物について

九州国際大学准教授　國﨑　　倫

17 世紀、テムズ河周辺の劇場は疫病流行のため頻繁に閉鎖を強いられた。Plague についてシェイクスピアコンコーダンスを開くと 103 例あり、Jew の 67 例を凌ぐ。多くの場合 plague という語は呪詛の一部に使われており、使用頻度の高さからエリザベス朝、ジェイムズ朝イングランドの日常に密接した概念であったと推測できる。しかし、そもそも plague とは何か。

本発表は、1603 年から 1665 年までに印刷された複数の死亡週報 (the weekly Bill of Mortality) をスタート地点とし、17 世紀ロンドンにおける印刷出版物を資料として辿りながら、疫病社会に発生する「文化」の一部をできるかぎり客観的に考察する。当時の人口統計に加え、疫病感染時の症状と治療法、ペスト流行に乗じた悪徳商法、聖職者の私欲が透ける説教、行政の対応、死の舞踏、舞台役者のぼやきなど、演劇文化が繁栄する土壌を疫病と死という観点より考察したい。

第　2　室（2604 教室）

司会　福岡教育大学教授　江頭　理江

1.　近代性を揺るがす
――『ハックルベリー・フィンの冒険』における魔術的言説

九州大学大学院修士課程　古川　琢磨

マーク・トウェイン『ハックルベリー・フィンの冒険』(1885)に散在する魔術的言説は、個人主義やフロンティア史といった 19 世紀アメリカの歴史・思潮を多分に反映した近代小説としての同作品における異物である。ハックやジムが時折言及する迷信は、上述のような同作品の「近代性」によって作品の周縁に追いやられているものではなく、むしろ近代性を終始一貫させるプロット構造を崩す効果を有している。

本発表では、同作家が『アーサー王宮廷のコネチカット・ヤンキー』(1889)や『ジャンヌ・ダルクについての個人的回想』(1896)といった中世ヨーロッパを主題とする小説を上梓したことを意識しつつ、『ハックルベリー・フィンの冒険』において魔術的言説がいかに機能しているのかについて考察する。迷信をはじめとする非近代的な要素に着目することで、19 世紀アメリカという同時代的文脈を越えて、ヨーロッパ史との関係の中で同作品の新たな解釈を提示したい。

司会　福岡大学教授　大島由起子

2.　演技する混血児
――“Désirée’s Baby”におけるイノセンス喪失とパフォーマンス

九州大学大学院修士課程　松下　紗耶

Kate Chopin の短編“Désirée’s Baby”では、ジェンダーと共に「混血」もまた大きなテーマとなる。物語終盤で、Désirée の夫である Armand が黒人の血を受け継いでいることを我々読者は知るが、アメリカ社会で生きる肌の白い混血児において、自分の人種を知るということは非常に大きな要素である。これまでの“Désirée’s Baby”の批評では、女性であるがゆえに Armand によって黒人という人種を押し付けられる Désirée に焦点を集めたものが多い。しかし、実際に混血であるのは夫である Armand のほうであるのに加え、人種を決定付ける側である男性からの視点を忘れてはならない。本発表では自らの人種を認識することを「イノセンスの喪失」と位置付け、喪失後の登場人物の人種、そしてジェンダーにおけるパフォーマンス性を読み解く。Armand の「イノセンスの喪失」の時期を考え直すことによって、男性中心で白人至上主義であった 19 世紀末のアメリカ南部社会で、Désirée に黒人という烙印を押す Armand と押される Désirée にどのようなパフォーマンス性が帯びるかを考察し、人種とジェンダーが互いに与え合う影響を読み解いていく。

第　3　室（2602 教室）

司会　長崎大学教授　廣江　　顕

1.　Modality と Mood から考察する If-clause の派生

九州大学大学院修士課程　高場　清子

学校文法では時や条件を表す副詞節が未来の内容を表す場合 will は生起しないと説明するが、実際はその限りではない。

Haegeman(2014)は if 節を vP や TP に付加する中心的 if 節(if-_C)と、TP の外側で CP に並行して併合する周辺的 if 節(if-_P)に二分した。If-_C の時制演算子と法演算子は主節の T の作用域に属するが、if-_P の時制演算子と法演算子は主節の T に構成素統御されないのでその作用域に入らず、独立した解釈を受ける。従って、未来に言及する if-_P には未来予測の will が生起すると想定されるが、これに反する例が存在する。

また、金子(2009)は認識様態の if 節を TP 外部の機能範疇である遂行句(performative phrase=PfmP)の領域に属する付加詞であるとし、will の生起・不生起現象を PfmP の主要部における抽象的法演算子 Mod の有無に基づいて分析した。

しかし、仮定法にも存在する if-_P の Modality と Mood については上記の先行研究では説明できない。そこで本発表では if 節を二分化する分析を吟味し、CP 領域の細分化によって if 節の派生の再検討を試みる。

司会　産業医科大学准教授　田中　公介

2.　Phrasal verb の分析——make out 構文の派生と構造

九州大学大学院修士課程　柳本　拓志

本発表では、これまで多くの研究で取り上げられてきたいわゆる例外的格表示構文(ECM 構文)に関して議論する。その中でも、とりわけ make out 構文に関する構造と派生に焦点を当てる。make out 構文では、(1)のように不定詞の主語の位置に対して随意性があるのだが、(2)のようにそれが代名詞になるとその随意性はなくなり、動詞に隣接していなければならない。

(1)　a. They made John out to be a liar.
　　b. They made out John to be a liar.
(2)　a. They made him out to be a liar.
　　b.*They made out him to be a liar.

(1)に見られる随意性は一見問題のないもののように思われるかもしれないが、Chomsky(2013)に対する問題を提起するものである。さらに、phrasal verb に関する分析は先行研究において多く議論されているが、上記(2)の代名詞の語順に対する分析に関してはまだ十分になされていないように思われる。

本発表では、 (1)と(2)の文に見られる不定詞主語の随意性と代名詞のふるまいの特性を、近年におけるミニマリストの分析に照らしてその構造と派生を考察し、Chomsky(2013)に残る問題点の解決策を提案する。

シンポジウム

第 1 部門「イギリス文学」(2601 教室)

実話から紡ぎ出すフィクション
——21 世紀英連邦歴史小説(ヒストリカル・フィクション)が描く「周縁」の人々

司会・講師	水産大学校教授	高本　孝子
講師	福岡大学名誉教授	中村ひろ子
講師	西南学院大学助教	濱　奈々恵
講師	熊本県立大学准教授	水尾　文子

歴史小説を書くことは、歴史を新たな視点から見つめ直し、書き直す作業でもある。そうした意図のもと、イギリス連邦の国々においては 1990 年代頃より歴史小説が盛んに書かれるようになってきた。それらの作品群を見てみると、歴史上重要な人物たちが新たな視点から描かれる一方で、歴史の表舞台に立つことのなかった人々を取り上げた小説も増えてきている。さらに、プロットの中心をなす事件についても、歴史を変えるような大事件から、時とともに歴史に埋もれてしまった三面記事的な事件を描いた小説へと関心が移ってきているようだ。その背景には、ポストモダン思想の影響により「周縁」に目を向ける意義が広く認められるようになったことがあるだろう。

そこで本シンポジウムでは、実際にあった事件または実在した人物たちを中心に据えた小説、その中でも特に市井の人々や社会の規範から外れた人々を描いた小説を４篇取り上げ、それらの史実や人々を小説に取り入れることに作家たちがそれぞれどのような意義を見出しているかを明らかにしたい。

詩人作家が挑む狂気と聖俗の「迷宮」
——Adam Foulds, *The Quickening Maze*——

中村ひろ子

Adam Foulds (1974-) の *The Quickening Maze* は、2009 年のマン・ブッカー賞最終候補となった作品で、John Clare と Alfred Tennyson が 1838 年から 41 年にかけて入院・滞在した精神治療施設を取り上げ、精神病患者と精神治療施設の経営者 Matthew Allen、およびその家族・職員を描いたものである。フォウルズは季節の移ろいを背景に２人の患者（クレアと Margaret）の内面を追いながら狂気の変容する過程、とりわけ施設から脱走するに至る「狂人」クレアの現実と妄想の混在を凝視している。また、医師アレン氏の一儲けのための事業計画と破綻、それに巻き込まれるテニソンの姿を織り込み、対照的な２人の詩人の姿を蘇らせ彼等の実像にも迫っている。本発表では、暴行・性的虐待や不衛生な治療施設を舞台にした本作品において、アレン氏の世俗性と、精神病患者（周縁の人々）の狂気と一種の純粋性が森に囲まれ出口の見えない迷宮で浮かび上がる点を考察したい。

離婚裁判と女同士の格付け
——Emma Donoghue, *The Sealed Letter* における女たちの戦い——

濱　奈々恵

2010 年に *Room* でマン･ブッカー賞の最終候補に残った Emma Donoghue (1969-) は、実話に着想を得て小説を書くことが多い。本発表で取り上げる *The Sealed Letter* (2008) もその一例で、これは 1864 年に英国を席巻した Codrington 夫妻の離婚裁判をもとにした歴史小説である。裁判の様子は当時の *Times* に掲載され、そこで妻 Helen が不貞を重ねていたこと、しかも彼女と最も仲が良かった出版社（Victoria Press）経営の Emily Faithful とはレズビアンの関係にあったことがほのめかされている。「伝統的な女性」であるヘレンも、「新しい女性」であるエミリーも、ともに男性を中心とする社会規範と戦うことを余儀なくされた女性たちであったが、この２人の間でも生き方をめぐる戦いが存在していた。しかも彼女たちに向けられる世間のまなざしは当時と今とでは、大きく異なっている。本発表では 21 世紀文学の特徴である「過去の書き直し」を中心に、ドナヒューが社会の周縁にいた彼女たちをどう描いているのか、その独特な焦点のあて方を考察していく。

殺人事件を通して構築される周縁の女性
——Sarah Waters, *The Paying Guests* が描く 1920 年代——

水尾　文子

Sarah Waters (1966-) の *The Paying Guests* (2014) は、1922 年にロンドン郊外で起こった Ilford 殺人事件に着想を得て書かれた作品である。夫が妻の若い愛人に殺害されるというこの事件は社会を震撼させ、愛人による夫殺害計画を知らなかったとされる被害者の妻も殺人罪に問われ、裁判の末死刑に処された。イルフォード殺人事件とは異なり、*The Paying Guests* では、妻 Lilian の愛人を女性に設定し、妻が夫を殺害する。作品は、愛人 Frances の視点を通して語られる。実際に起こった殺人事件を題材にしているものの、作品の焦点は、事件そのものではなく、リリアンとの出会いからリリアンによる夫殺害、警察の捜査と誤認逮捕、起訴された容疑者の裁判と判決といった一連の出来事を語るフランシスの心理描写におかれている。本発表では、殺人事件を作品に取り入れた作者の意図に目配りしながら、第一次世界大戦の余波に翻弄され社会の周縁におかれたフランシスを通してウォーターズが 1920 年代を、とりわけ、この時代に生きる女性同士の関係をどのように構築しているかを考察したい。

表裏一体の「善」と「悪」
——Richard Flannagan, *The Narrow Road to the Deep North*——

高本　孝子

2014 年度マン・ブッカー賞受賞作品 *The Narrow Road to the Deep North* は、後に「死の鉄道」と呼ばれるようになった泰緬（たいめん）鉄道の建設作業に従事させられたオーストラリア人捕虜たちの経験を描いている。この実話を一言で表すならば、「日本軍が連合軍の

捕虜たちに過酷な労働を強いた話」になろう。だが、作者 Richard Flannagan (1961-) はそれにとどまらず、フィクションを混ぜることにより人間の普遍的なありようを描いている。その顕著な例は、捕虜たちのリーダーである主人公 Dorrigo Evans が、飢餓に苦しみながらも、自分がもらったステーキを捕虜仲間たちに与えてしまうエピソードだ。一見するとドリゴの行為は自己犠牲の美徳そのものに見えるが、部下の手前そうせざるを得なかったという点では、監督者としての権威を失わないために捕虜を拷問死に至らしめるしかなかった日本軍少佐ナカムラ・テンジの行為と同質のものだといえる。このように、閉塞的な状況に置かれた集団の中で主体性を奪われてしまったドリゴやナカムラら組織の末端の男たち（周縁の男たち）を描くことにより、作者は善と悪の本質に鋭く切り込んでいるのだ。本発表ではこの点を中心に本作品を読み解いてみたい。

第 2 部門「アメリカ文学」(2604 教室)

書簡から見る Henry James
——ライバル作家、家族観、プライヴァシー、ヨーロッパの表象

司会・講師	北九州市立大学准教授	齊藤　園子
講師	九州ルーテル学院大学准教授	砂川　典子
講師	九州産業大学准教授	志水　智子
討論司会・講師	佐賀大学教授	名本　達也
コメンテーター	京都大学教授	水野　尚之

近年、Henry James 研究において、以前にも増して書簡に対する関心が高まっている。未出版のものを含めて書簡の活字化が進められ、日本においても、家族や友人に関係する書簡の邦訳が出版されている。今後もこれまで以上に、書簡の研究成果による研究の発展が期待される。James 没後百周年を迎え、本シンポジウムは、長年の研究によって確立されたかに見える、James 作品の読み方、作家の姿、家族や他の作家との関係性、あるいは書簡研究自体が持つ意義や問題の所在について、近年の書簡研究を踏まえて新たな光を当てることを試みる。各発表は Henry James を共通項とするが、Nathaniel Hawthorne、Mark Twain、William Dean Howells、Honoré de Balzac、Grace Norton、Alice James、William James らをそれぞれの観点から取り上げる。各発表の後、コメンテーターを交えた意見交換の時間を持ち、広くはアメリカ文学研究の今後を学会参加者と共に考える機会としたい。

書簡から見る Henry James のローマ——在欧アメリカ人によるヨーロッパ表象

齊藤　園子

書簡を一つの手掛かりとして、長年在欧アメリカ人として執筆した Henry James の初期の作品に描かれるヨーロッパ、特にイタリアの都市ローマの姿に着目する。幼年期

を除くと、James のローマとの出会いは、作家が 26 歳の、1869 年 10 月に遡る。体調が悪く、ローマを目前にイングランドへ引き返すかどうか逡巡した後のことであったようだが、書簡には、ローマを目にして興奮冷めやらぬ作家の姿が記録されている。その後、James は数々の作品の背景にローマを用いた。初期の作品、*Roderick Hudson*（1875）、*Daisy Miller*（1878）、*The Portrait of a Lady*（1881）もそのうちである。

本発表では、Nathaniel Hawthorne の *The Marble Faun*（1860）、Mark Twain の *The Innocents Abroad*（1869）などの作品におけるローマ表象との比較・考察を行いながら、James 作品におけるローマ表象を探究することを試みる。James の先行者 Hawthorne や同時代の Twain との影響関係に接近すると同時に、在欧アメリカ人作家の系譜を辿る糸口になると思われる。

書簡から見る *The Bostonians* の創作と失敗
——James と Balzac、Howells のリアリズム

砂川　典子

Henry James の中期の代表作である *The Bostonians* (1886) は、「アメリカ的な小説を書きたい」という James の意気込みとは裏腹に出版当時成功をおさめることは出来ず、ほぼ同時期に発表された *The Princess Casamassima*（1886）の失敗と相まって James の心に深い傷を残した。創作ノートである *The Notebooks* や当時の書簡は、小説の失敗に対する James の率直な感情だけでなく、James が直面した様々な問題を明らかにしてくれる。

本発表では、*The Notebooks* や書簡を読み解きながら、*The Bostonians* の構想から執筆までの創作過程を明らかにしつつ、家族や友人たちとのプライベートなやり取りに現れる James の心理状態や他の作家からの影響やライバル関係を考察したい。特に、James が執筆中に意識していた Balzac と、*The Bostonians* と同時期に同じくボストンを舞台にした小説 *The Rise of Silas Lapham* (1885) を発表し、高い評価を得ていた Howells を中心に論じる。

Henry James の書簡からみる Henry と Alice の関係、James の女性観

志水　智子

Henry James と妹 Alice は気の合う、信頼し合える兄妹であった。Henry は 1872 年、叔母と Alice を伴ってヨーロッパを旅行し、父の遺産における自分の取り分を Alice に譲り、Alice の晩年には彼女をイギリスに呼び寄せている。Henry は病身の Alice に対して思いやり深い献身的な兄であり、Alice もまた Henry を深く信頼し、頼りにしていた。

旅先からの Henry から Alice への書簡では、つねに Alice の健康を気遣う様子が読み取れる。また Henry から家族への書簡においては、彼が Alice を旅のパートナーとして頼りにしている様子も伝えられる。Henry の Alice への思いは、彼の作品中の人間関係にも表れると考えられる。彼が Alice の健康や生活を気遣う思いは、例えば *Daisy Miller* (1878)における Winterbourne と Daisy の関係において、また *The Portrait of a Lady* (1881)

における Ralph と Isabel の関係において、さらには *The American* (1877)における Claire の幸せを願う兄 Valentin の心情においても反映される。また、Henry が Alice を頼りにする気持ちは、*The Ambassadors* (1903)において、パリで心躍らせる Strether が旅の案内人となる Maria Gostrey を頼る関係として描き出される。

本発表では、Alice が Henry の作品中の女性像や人間関係に与えた影響について、時に Grace Norton への書簡と比較しつつ、Henry の書簡や Alice の日記をもとに検証していきたい。

書簡、プライヴァシー、再構築される James の肖像

名本　達也

小説家 Henry James の人物像については、Leon Edel (1907-1997)の功績によって、20 世紀中にほぼ肖像画が完成したかに見える。事実、Edel は 1953 年から約 20 年を費やして、５巻からなる James の評伝を刊行し、ピューリッツァー賞を受賞した。20 世紀後半の James 研究において、Edel が最も権威のある批評家であったことは間違いない。

しかしながら、Edel の死後、他の研究者が小説家の遺した書簡を利用しようとすることを妨害していたとして、彼への非難が出始めた。さらに、Edel が評伝の執筆において、精神分析の手法を濫用したために、そこに描かれている James 像は、彼の実像とはかけ離れたものになっているのではないかというような指摘も散見され始めている。この発表では、James と Edel の関係を例に取り上げて、手紙と作家のプライヴァシーの問題、遺された書簡とその版権をめぐる研究者の関係等、書簡の扱われ方をめぐる諸問題に光を当てて論じてみたい。

書簡解読への期待

水野　尚之

幾多の精緻な作品を残した Henry James という謎めいた作家の全貌を知るために、彼の書簡の解読は有効な手段の一つと考えられる。これまでにも Lubbock、Edel、Skrupskelis と Berkeley らにより、James の書簡編纂の試みがなされてきた。最近では Walker と Zacharias による編纂が進みつつある。James 自身による手紙の焼却、さらには後世の不幸な事情による手紙の散逸などが推測され、もとより James の手紙の全貌を知ることは我々には不可能である。ただ、残された手紙だけでも一万通以上あり、James 個人のみならず当時の文壇の実際の姿を垣間見る貴重な資料となっている。日本でも最近の翻訳はめざましく、４人の女性に宛てた James の手紙、妹 Alice が兄の言動を記した日記などが邦訳され、Henry James の知られざる面に光を当てている。

今回のシンポジウムは、このように膨大な James の手紙や周辺資料を、ライバル作家、家族観、プライヴァシー、ヨーロッパの表象という観点から読み解く試みである。アメリカとヨーロッパを往復しつつ創作した作家、生前のみならず後世の研究者たちからプライヴァシーを探られレッテルを貼られ続けてきた作家 James の真の姿が、一部なりとも明るみに出る意義は大きいと考える。

第 3 部門「英語学」（2602 教室）

構文研究とコーパス

司会・講師	九州大学教授	大橋　　浩
講師	九州大学助教	土屋　智行
講師	九州大学助教	横森　大輔
講師	九州大学特任准教授	Carey Benom

語彙と文法を峻別し、普遍文法の探求を重視する生成文法では「構文」は規則適用の結果出力される付随的な存在物と考えられてきた。一方、認知文法や構文文法では構文を言語の基本単位と見なし、言語知識はネットワーク状に結びついた構文の集合体からなると考える。

ラネカーらによる認知文法は、言語能力を人間の一般的認知能力の反映と考え、構文は認知主体による言語使用からボトムアップ的に構造化されるという「使用依拠」の立場を取る。構文文法は当初認知能力との関係を重視しなかったが、近年、使用依拠の立場をとる研究が見られるようになってきた。

使用依拠による構文研究では、言語表現が実際の使用事象の中でどのように、そして、どの程度構文として定着しているかという観点から分析を行う。そのためには大規模な自然言語のデータを提供してくれるコーパスが極めて有効で強力なツールとなる。

本シンポジウムでは、活況を呈しているコーパスを利用した構文研究の現状を紹介する。

譲歩構文と拡張

大橋　　浩

近年、使用依拠による構文文法の枠組みでの研究、とりわけ通時的研究の増加が顕著である。言語変化は、話し手/書き手と聞き手/読み手による言語使用の場で生じる新たな形式と意味を持つ記号が拡大していくプロセスであると考えると、使用依拠の観点から見た言語の構造化の事例そのものととらえられる。また、言語変化には文脈や語用論的要因が関与し、その進行は漸次的である。Trougott and Trousdale(2013)は、すべての言語変化は構文の変化であるとして、そのプロセスの詳細な記述が可能な包括的枠組みを提示している。

本発表では、英語の譲歩構文をとりあげ、その構文としての特徴及び、新たな意味の発達とそれを引き起こす要因について、コーパスからの例を用いて示したい。

定型表現のコーパス分析からみる構文スキーマの形成プロセス

土屋　智行

構文文法には、実際の言語使用を基盤として構文的知識が形成されるという理論的な前提があり、その前提のもとに、特定の構文スキーマに焦点を当て、実際の言語現象を説明する研究手法が広くおこなわれている。その一方で、コーパスを利用して構

文をボトムアップ的に特定・抽出することで、使用基盤モデルの検証や構文スキーマ形成にかかわる認知プロセスの精緻化を試みる研究 (Erman and Warren, 2000) も進んでいる。

本発表は、構文と深く関係する定型表現 (Wray, 2003) とその拡張用法に着目し、そのコーパス分析を通して、構文の形成プロセスを考察する。定型表現とは、イディオムなどのように、慣習化している既成の表現であるが、複数の構成要素とその配列からなる点や、言語の慣習と記憶に関わる点など、構文との共通点も多い。定型表現の拡張用法の収集方法や実際の事例の観察と分析を通して、言語表現の蓄積が構文へと抽象化されるプロセスの一端を明らかにしたい。

会話コーパスに基づく中断節構文の分析

横森　大輔

話し言葉にみられる様々な言語現象は、構文的アプローチの有効性が特に期待される領域の一つであり、近年では会話研究と構文研究を接合する試みも現れている（例えば Fischer（2015））。本発表では、日本語の話し言葉において従属節が主節を伴わずに発話を構成する現象、すなわち「中断節構文 (Ohori, 1995) 」を題材に、会話コーパスを利用することでどのような構文研究が可能になるか示すことを目的とする。特に、名詞修飾節が中断節構文として用いられるケースに焦点をあて、会話コーパスの観察から、（１）構文の形式的特徴の記述において、語彙や形態統語論だけでなく、発話に混じる笑い、音量、ごくわずかな隙間（ポーズ）といった要素を分析に含めることの意義、そして（２）構文の機能的特徴の記述において、(狭義の）意味論・語用論だけでなく、社会的相互行為という視点を導入することの意義を示したい。

Husbands and Wives in English and Japanese: A Corpus-Based, Cognitive, Constructionist Approach to the Lexical Semantics and Sociopragmatics of Some Translational Equivalents

Carey Benom

How do we talk about married men and women in various languages? What do these patterns of language use tell us about our conceptualization of gender? To address these questions, I employ a cognitive approach to lexical semantics, as well as the perspectives and tools of construction grammar and corpus linguistics, to analyze and motivate patterns in the data, arguing that the results speak to larger social themes regarding differences in how we conceptualize different sexes / genders.

Only relatively recently has attention been paid to the deep relevance that sociolinguistics has to (and the influence it should have within) cognitive linguistics, and there has begun an effort to make cognitive linguistics more social, and sociolinguistics more cognitive (in e.g. Croft 2009, Geeraert et al 2010, and Hollmann and Siewierska 2011). Following suit, I will argue that sociolinguistics needs cognitive linguistics, demonstrating that what can be seen as some of the primary strengths of cognitive linguistics - lexical semantic analysis, conceptual metaphor theory, and construction grammar - are extremely useful tools with which we may deepen our understanding of language use in ways that allow us to gain insight into social structure and social psychology.

〈第 2 日〉10 月 23 日（日）

研　究　発　表

第　1　室（2601 教室）

司会　山口大学教授　宮原　一成

1.　『恋する女たち』における同性間の絆

九州大学大学院博士後期課程　田島健太郎

D. H. ロレンスによる『恋する女たち』 (1920) は、全体としては男女間における性愛の哲学を語る作品である。しかしその一方で、こうした中心的な理念とは一見相容れない、同性愛的な関係が挿入されている。作者の分身であるバーキンはアーシュラに求婚するものの拒絶されると、内面に空虚さを抱えた友人の実業家ジェラルドと格闘する（同性愛を示唆するような仕方で描写されており、しばしば注目される場面である）。結末では、バーキンはアーシュラとの永久的結合を成し遂げ結婚に至るが、より完全な生のためには「同性との永久的な結合」をも欲していたのだと明かす。

本発表はこのように、異性愛と同様に「生の充足」をもたらしうるものと示唆されているジェラルドとバーキンの関係性に注目し、異性愛の哲学を中心に据えた『恋する女たち』において、同性間の絆がどのような役割を与えられているのかを考察する。

2.　The Gothic in Neil Gaiman's *Coraline*

福岡大学大学院博士後期課程　馮 書穎（ヒョウ　ショエイ）

Coraline (2002), the award-winning and critically acclaimed dark children's novella by Neil Gaiman, tells the story of how a young girl called Coraline survives a fantastic adventure that includes a horrific encounter with a creature named "the other mother" and rescues her parents. Unlike most works of classic children's fantasy, such as *Alice's Adventures in Wonderland* (1865), *The Wonderful Wizard of Oz* (1900), and *Peter Pan* (1902), in *Coraline* Gaiman writes a disturbing Gothic plot, terrifying grotesque phenomena, and a pure evil supernatural antagonist. I believe that because of its explicit depiction of Gothic phenomena, despite being children's literature, the novella appeals to adult readers as well. In this paper I plan to analyze the Gothic in *Coraline*. Firstly, I would like to examine the Gothic in *Coraline* from three aspects: the Gothic plot and style, the grotesque illustrations, and the appearance of the supernatural. And then I would like to demonstrate how the Gothic helps *Coraline* appeal to adult readers and to deliver more profound and dark themes for mature readers.

司会　大分大学准教授　園井　千音

3.　ロマン派とピクチャレスク――キーツの自然観に関する一考察

佐賀大学准教授　江口　　誠

「ピクチャレスク」(picturesque)は、エドマンド・バークが定義した 2 つの重要な概念である崇高と美とを繋ぐ役割を担うものとして、ウィリアム・ギルピンによって導入された美的概念である。本発表では、ジョン・キーツのスコットランド旅行の記録や詩を通して描き出される彼のピクチャレスク論及び自然観に迫りたい。つまり、同時期に創作された詩や書簡を手掛かりに、彼のこの心境の変化――ピクチャレスクを受容しながらも、最終的にはその美的概念を排除するに至った経緯――を辿り、さらにはその理由を明らかにしたい。

加えて、本発表では歴史的・社会的な視点からもキーツの自然観に迫りたい。18 世紀から 19 世紀に掛けてはエンクロージャー（囲い込み）が行われ、イギリスの土地所有形態が変化した時代でもあった。そこでピクチャレスクが果たした役割とは何だったのか、さらにその変化に対するキーツの回答はどのようなものだったのか、という点も明らかにしたい。

4.　*Winnie the Pooh* と *The House at Pooh Corner* の詩からみる成長

福岡大学大学院博士前期課程　大関　真菜

児童文学作品において、作中に詩が盛り込まれている代表的な作品である A. A. Milne の *Winnie the Pooh* と *The House at Pooh Corner* は多くの詩が盛り込まれており、詩と散文を効果的に組み合わせた作品である。このプーの２作品は、ミルンが息子が寝る時に読める本をいうコンセプトで書かれていることから、読み手とともにキャラクターが成長していく作品である。これらは子ども向けであることから卜書きにあたる部分がなく、「行動」と「言葉」だけで書かれているために、詩は散文を補助する添え物ではなく、作中で非常に重要な役割を果たしている。したがって、プーの２作品の中の詩は、特にキャラクターの成長を顕著に感じさせるものであると考える。

本研究では、A. A. Milne の *Winnie the Pooh* と *The House at Pooh Corner* の 2 作品に焦点を当て、作中の詩からみる成長について考察し、詩がどのように物語と一体化して、プーをはじめとする登場キャラクターの成長を描いているのか、さらに詩が物語に果たす役割について検証を行い考察していく。

司会　九州大学名誉教授・福岡大学名誉教授　山内　正一

5.　イギリス・ルネサンス恋愛詩を歴史的に読む
――スペンサー『アモレッティ』の場合――

熊本県立大学教授　村里　好俊

12 世紀南仏で生まれ、新しい〈精美の愛〉を、愛の喜び、愛による人格の向上、〈愛の宗教〉を唱え、女性崇拝の歌を書いたトゥルバドゥールと呼ばれる叙情詩人

たちの流れを汲み、愛する女性に愛を捧げ、詩的技法を凝らして歌った代表的詩人が、イタリアのダンテとペトラルカである。重要なのは、ダンテのベアトリーチェへの恋愛詩も、ペトラルカのラウラへの恋愛詩も、あの世へと旅立ってしまい、現世では二度と再び相まみえることのない女性に対して、切々と恋心を歌っていることである。この〈決して叶えられない愛〉の理念が、ヘンリー八世に仕えた廷臣で、外交官として早くからフランスやイタリアに渡航する機会に恵まれた詩人ワイアットによって紹介され 16 世紀後半のイギリス詩人たちに継承される。

1590 年代には Sidney の *Astrophil and Stella* が先鞭を付け《連作ソネット詩集》が大流行し、詩人たちは意匠を凝らして《決して叶えられない愛》を連綿と歌った。ただスペンサーは、他の詩人たちとは違って、得恋を歌う。スペンサーの意図は何であったか。本発表では、それを追求してみたい。

第　2　室（2604 教室）

司会　松山大学教授　矢次　　綾

1.　*Barnaby Rudge* と群衆のメディオロジー——イメージとネットワーク

北九州市立大学大学院博士後期課程　原田　　昂

本発表は、Charles Dickens の *Barnaby Rudge* 分析から、群衆とその形成に対する作家の意識を読み解くものである。本作品における群衆は、本来無関係な人々によって構成されているにも関わらず、きっかけを与えられると突然結集する説明し難い存在として描かれる。Dickens は群集そのものではなく、主人公 Barnaby を群衆の核として描くことで、非合理的な群衆を捉えようとする。人々の先頭に立った Barnaby は暴動の象徴となり、暴徒たちのさらなる行動のきっかけとなった。一方で、互いに顔を知らない大衆という現象を可能にした時代背景的要因として、都市のネットワークにも注目する。本作品における最大のメディアは、暴徒たちが情報交換を行う酒場である。産業革命後の都市における社交場は、初めて人や情報をネットワーク化するメディアであった。大衆はここから生じる。ここに、より複雑化し拡大した 19 世紀社会の原型が見られる。

司会　福岡女子大学名誉教授　吉田　徹夫

2.　銀と茶の海賊——スティーヴンソンとコンラッド

福岡女子大学准教授　宮川美佐子

スティーヴンソンとコンラッドは、エキゾチックな外国を舞台にした冒険、男性中心の世界など、作品のストーリーや設定に一見して類似が認められるのに反して、比較されることがあまりなかった。その大きな要因の一つは、後者がモダニズムの作家として高く評価される一方で前者が浅薄な娯楽小説の作家と見なされた時代が長かっ

たことにある。近年ようやく二人の比較研究が行われるようになり、指摘すべき興味深い点はまだ多く残っている。

本発表では、二人の作家の比較が遅れた事情を伝記的側面と文学研究の側面の両方から考察したうえで、*Treasure Island, The Master of Ballantrae*, “Heart of Darkness”, *Lord Jim*, *Victory* などを用いて、海賊といういかにも冒険小説的な共通するモチーフを通して、それぞれの作家としての特徴を明らかにしたい。

司会　九州大学教授　鵜飼　信光

3.　人肉嗜食、人狩り、屠殺
――コンラッド作品におけるカニバリズムのモチーフ

九州工業大学非常勤講師　今川　京子

Joseph Conrad（1857-1924）の作品にはカニバリズムのモチーフが幾度も登場する。この表象を介して、彼は人間の非合理性、さらには他者の肉を喰らう人間精神の構造を究明する狙いがあったと考えられる。本発表では、カニバリズムを真正面から扱いながら、そこに愛のイメージをも重ね合わせている中編“Falk”（1901）、異物としての他者と対峙するときに可視化する動物としての人間、その人間の本能的攻撃性を明らかにする短編“Amy Foster”（1901）、そして政治小説としての性質を持ちながら、虚偽と欺瞞、仮面的性質を持つ家庭の闇に迫った *The Secret Agent*（1907）に焦点を当てる。自己保存の本能的欲動としてのカニバリズム、性衝動の発露としてのカニバリズム、同種攻撃と破壊衝動としてのカニバリズム、Conrad が一貫してカニバリストのイメージで人間存在を捉え、生の諸相や社会構造、共同体をカニバリズムの変奏として解釈してきたことを、三作品の比較を通じて論証する。

4.　トールキンの聖戦

九州大学大学院博士後期課程　島居　佳江

トールキンの作品中、戦いの場面は多い。息つく間もない戦いの緊張感を織り交ぜながら緩急つけた筋立てはトールキンの十八番であり、多くのロールプレイゲームのたたき台ともなっている。アクィナスは正戦の三つの条件、すなわち「正当な権威」「正当な理由」「正当な意図」を提示している。正戦の定義が定着する以前、７・８世紀の間にイギリスからヨーロッパ大陸へキリスト教布教のための宣教師団を送る動きがあった。フランク王国のカール大帝もその流れの中で軍を送っており、その後のカロリング朝の隆盛とも相まってキリスト教は急速に広まった。トールキンは彼の講義の中でこのヨーロッパ布教を古代イギリスにおける主要な栄光の一つに数えている。トールキンの戦いの場面は、読者にスリルや興奮を与えることだけを目的にしたわけではなく、彼にとっての贖宥なのである。トールキンが地獄や煉獄を信じ、贖罪行為として作中に戦ったことを考察し、彼の聖戦について論じる。

5.　【発表なし】

第　3　室（2602 教室）

1.　【発表なし】
2.　【発表なし】

司会　熊本大学准教授　永尾　　悟

3.　Ikkemotubbe の微笑みと生の横溢
——1940 年代のアメリカと Faulkner のインディアン表象

九州大学大学院博士後期課程　吉村　　幸

William Faulkner が先住民族（インディアン）を作品のテーマに執筆した 4 つの作品の中で最後に発表された“A Courtship”（1948）は、1940 年代前半に金儲けのために書かれたとされる作品の一つであり、出版された翌年には O Henry 賞を受賞した。本作品は先に書かれたインディアンをテーマとする 3 つの作品－“Red Leaves”（1930）、“A Justice”（1931）、“Lo!”（1934）－に並べて解釈されることが多く、初期の作品に見られた技巧の器用さや内容の密度が欠けていると指摘される。

本発表では主に“Red Leaves”、“A Justice”、そして“A Courtship”に見られるインディアンの表象に着目し、インディアンをテーマにした最後の作品“A Courtship”の新たな解釈を導き出してみたい。“A Courtship”と先に書かれた 2 つの作品のインディアンに注目すると、Faulkner のインディアン表象には様々な変化を読み取ることができる。このような先住民族の表象の変化と当時の Faulkner の伝記的な要因を考慮することで、“A Courtship”と作家 Faulkner の新たな一面を明らかにしたい。

司会　鹿児島大学教授　竹内　勝徳

4.　野生という思想——ソローからレヴィ＝ストロースへ

九州大学教授　高橋　　勤

日本のアカデミズムにおいて「野生」という問題が思想上クローズアップされたのは、おそらくレヴィ＝ストロースの『野生の思考』の出版に依るものであったろう。レヴィ＝ストロースの *La Pensee Sauvage* の出版は 1962 年だが、そのほぼ百年前にアメリカ先住民の文化をとおして野生（the Wild）という問題を深く探求し、文明社会における「野生」の意義を考察しようとした思想家がいた。ヘンリー・ソローである。ソローは ”Walking” というエッセイにおいて、あらゆる文化の基層をなす自然、その経済と生命原理を「野生」という概念を用いて説明しようとした。本発表では、「野生」という概念を基軸として、ソローとレヴィ＝ストロースの思想を比較検討したい。両者はともに北米先住民に深い関心を抱き、生活の習俗と技術をこえて、その思考法と想像の世界を西洋文明と比較において捉えようとした。本発表ではとくに言語と神話の関係性に焦点をしぼり、科学思想にみられる二元論的な思考法と神話的な思考を対照することで、両者の思想の連続性と相違点に明確な輪郭を与えたい。

5.　【発表なし】

第　4　室（2605 教室）

1.　【発表なし】

司会　宮崎公立大学教授　福田　　稔

2.　主語の島効果に見るフェイズ性の継承

九州共立大学准教授　黒木　隆善

本発表では、Chomsky (2015)において提案されたフェイズ性の継承と Chomsky (2008)で提案されたフェイズ指定部の特性を用いることで、主語の島効果に関する諸現象の説明を試みる。Chomsky (2008)では、フェイズ指定部(phase edge)の内部からの抜き取りは不可能であるという提案のもとに主語の島効果の説明を試みているが、Gallego (2010)においてスペイン語の場合にはフェイズ指定部からの抜き取りが可能となる等、経験的な問題が指摘されている。本発表では、これらの問題点が、フェイズ性の継承によって、フェイズ指定部も同時に下位の位置へと変更されることから、本来フェイズ指定部であった場所からの抜き取りが可能となるという提案を試みる。また、英語の主語の島効果に関しては問題となるが、この問題点に関しては、Rizzi (1997)のカートグラフィー分析等に基づき、説明を試みる。

この分析により、Chomsky (2015)において提案されたフェイズ性の継承が、空範疇原理とは独立した観点から必要であることを示すことが可能となる。

司会　九州工業大学講師　前田　雅子

3.　制限関係節に関する考察
——ラベリングアルゴリズムに基づく *that*-trace 効果との統合的説明

九州大学大学院修士課程　林　　愼将

生成文法において、顕在的な *that* の後ろから *wh* 主語を抜き出すと非文法的になるという *that*-t 効果は多くの関心を集め、これまで、Pesetsky and Torrego (2001)や Chomsky (2013, 2015)等によって有効と思われる解決案が出されてきた。しかし、制限関係節(Restrictrive Relative Clause: RRC)においては、主語を関係節化を通して抜き出す際、*that*-t効果の場合とは逆に、*that*が顕在的でなければならない。このRRCの振る舞いは、*that*-t 効果を説明している二つの先行研究のどちらにも問題を呈するものである。
本発表では、Chomsky (2013, 2015)のラベリングアルゴリズムの下で、RRC の派生では関係節解釈に必要な演算子と関係節の先行詞が Merge をした状態で派生に入り、派生の途中で切り離しが行われると想定する。その切り離しによって、*that*-t 効果の際に問題となっていたラベルの問題を回避し、顕在的な *that* の後ろからの抜き出しが可能になる。一方、*that* が省略された場合に主語からの関係節化を行うと、ラベルが決まらない問題が起こり、そのような派生は排除されるとして RRC における *that* の分布を説明する。

司会　熊本大学教授　登田　龍彦

4.　動詞句副詞と意味役割

西南学院大学大学院博士後期課程　西村　知修

副詞の生起位置に関しては、副詞を機能範疇の指定部に位置づける分析と、付加詞と考える分析に主に分かれている。指定部分析では副詞の位置と解釈を厳密に固定するため、次のように副詞が比較的自由な位置に生じることができることを説明するのが困難である。

(1) (Wisely,) they (wisely) will (wisely) have (wisely) declined her invitation.
(Ernst 1998: 135)

一方で付加詞分析は副詞の自由な位置を説明できるものの、次のような例が非文であることを何らかの制約をたてることなしに説明するのは難しい。

(2) *She has loudly snored.　(Haumann 2007: 34)

本発表では付加詞分析の立場をとり、動詞句修飾の副詞に関しては Kaga(2007)の提案する動詞句の意味役割を考慮に入れることで、特別な制約なしに非文の生成の抑制ができ、解釈の多様性についても説明が可能であると主張する。

5.　Asymmetry between Multiple Coordination and Modification

福岡大学教授　久保　善宏

等位構造や形容詞による修飾構造において、等位項が三つ以上の多重等位構造と形容詞が四つ以上の多重修飾構造には興味深い非対称性が見られる。等位構造に関しては、等位項が二つの場合には、等位接続詞 and が生起し、また等位項の範疇素性に例外が見られるのに対し、等位項が三つ以上になると、接続詞 and の生起に特異性が生じ、等位項の範疇素性に見られた例外が消失する。一方、形容詞の修飾構造に関しては、名詞に先行する形容詞が二つないし三つの場合は、形容詞の順序や形容詞の性質による and の有無に規則性が見られるのに対し、形容詞が四つ以上になると、その規則性が見られなくなるという例外的現象が生じる。すなわち、多重等位構造では、ある種の規則性が現れてくるのに対し、多重修飾構造では、ある種の規則性が消失するという非対称性があるのである。

本発表では、これらの相反する現象は、英語という言語に固有のものなのか、あるいは他の言語にも見られるものなのか、また、もし後者であるとすると、このような非対称性は人間言語のいかなる性質に起因するのか、ということを考察していく。

特　別　講　演（2405 教室）

司会　九州大学教授　西岡　宣明

演題　英語構文とその拡張について

講師　関西外国語大学教授・大阪大学名誉教授

大庭　幸男（おおば　ゆきお）

講演内容

本講演では、英語の構文の拡張について考察する。特に、英語の動詞の意味的・統語的特徴に焦点をあてて、その特徴から英語の構文はテンプレート（template）とブレンディング（blending）等によって拡張されることを示す。テンプレートに関わる英語構文として、同族目的語構文と結果構文を取り扱う。特に、テンプレートは基本的には他動詞を伴うものであるが、このテンプレートを使用することで自動詞、特に非能格動詞にも同族目的語構文や結果構文が拡張されることを示す。一方、ブレンディングに関わる英語構文として、二重直接目的語構文と中間構文を取り扱う。二重直接目的語は他動詞文と他動詞文がブレンディングして新たな構文として派生されたものであり、中間構文では能動文と受動文がブレンディングして新たな構文として派生されたものであることを示す。このような英語構文の拡張について議論する過程の中で、それぞれの構文の統語的・意味的特徴も併せて示していきたい。

講師紹介

1949 年福岡県生まれ。九州大学大学院修士課程修了後、山口大学教養部、大阪大学大学院言語文化研究科、同大学大学院文学研究科で研究と教育を行い、現在、関西外国語大学外国語学部に勤めている。阪大在職中に客員研究員として MIT に留学した。また、大阪大学より博士（文学）の学位を取得した。なお、関西外国語大学では理事、評議員、研究科長を、学外では日本英語学会の会長を務めている。

主な著書として『英語構文研究—素性とその照合を中心に—』（英宝社：1998 年（市河賞受賞））、『左方移動』（研究社：2002 年）、『英語構文を探求する』（開拓社：2011 年）などがあり、主な学術論文として“On Locative-Inversion Sentences”『英文学研究』第 59 巻第 2 号（1982 年）、“On Preposition Stranding in Noun Phrases” *English Linguistics* 1（1984 年）、“On γ-Assignment in LF” *English Linguistics* 4（1987 年）、“The Empty Category Principle and Multiple *Wh*-Questions” *English Linguistics* 6（1989 年）、“X' Convention and Extended Minimality” *English Linguistics* 9（1992 年）、「格理論と可視条件」『英文学研究』第 69 巻第 2 号（1993 年）、“On the Double Object Construction” *English Linguistics* 10（1993 年）、「優位効果と最小連結条件」『英文学研究』第 73 巻第 1 号（1996 年）、“Island Phenomena and Search Spaces of a Probe” *Linguistic Analysis* 30.1-2（2004 年）、“The Double Object Construction and Thematization/Extraction” *English Linguistics* 22.1（2005 年）、「英語の同族目的語構文の統語構造について」『英文学研究（支部統合号）』第 5 号（2013 年）などがある。